

倫理をめぐる新カント派と経験批判論者との論争

佐藤, 正則
九州大学大学院言語文化研究院 : 准教授

<https://doi.org/10.15017/1500411>

出版情報 : 言語文化論究. 34, pp.67-75, 2015-03-20. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン :
権利関係 :

倫理をめぐる新カント派と経験批判論者との論争

佐藤 正 則

はじめに

1890年代末から1900年代にかけてロシアでは、西欧哲学の新たな潮流に触発され、既存のマルクス主義哲学に飽きたらず、マルクス主義を理論的に再検討し、新たなマルクス主義哲学を構築しようとする試みが盛んにおこなわれ、理論家の間で活発な議論が闘わされた。この時期のロシア・マルクス主義は、哲学面では大きく3つのグループに分けることができる。暫定的に「唯物論グループ」、「新カント派グループ」、「経験批判論グループ」と呼ぶことにする。唯物論グループは、マルクス主義を唯物論哲学として確立させようとする立場で、ゲオルギー・プレハーノフ（1856-1918年）に代表される。新カント派グループは、マルクス主義をドイツの新カント派の批判主義で補強しようとした人々で、セルゲイ・ブルガーコフ（1871-1944年）やニコライ・ベルジャーエフ（1874-1948年）が知られる。経験批判論グループは、オーストリアの哲学者エルンスト・マッハ（1838-1916年）の経験批判論とマルクス主義とを融合しようとする一派で、アレクサンドル・ボグダーノフ（本姓マリノフスキー、1873-1928年）やアナトーリー・ルナチャルスキー（1875-1933年）がその代表である。¹

このうち、新カント派グループと経験批判論グループとの間で激しい応酬があった事実は見落とされがちである。かつてロシア・マルクス主義の歴史が正統－異端図式で描かれていたこともあり、ともに異端的潮流とみなされたこのふたつのグループの間の論争は、ほとんど注目されてはこなかった。また、欧米の研究者たちは、この論争を新しい観念論哲学と古い実在論・唯物論との対立という紋切型の図式でとらえてきた。²

しかし、大きく異なる哲学的見解を抱いているものの、このふたつのグループはともにこれまでのマルクス主義に異を唱え、新たなマルクス主義哲学を構築しようとしたのであり、したがって、表層の対立にもかかわらず、深層にはある共通意識が潜んでいるとも考えられる。彼らの間の論争がいかなるものであったのかという問題は、ロシア知識社会の全体的構図を明るみにするうえでも、見逃すことはできない。実際、認識理論においては、新カント派グループと経験批判論グループは、表面上は対立する哲学的見解を唱えながらも、ともに唯物論と観念論双方を克服できる新たな「実在論」の構築をめざしており、このことを当事者たちも一定程度、自覚していた。³

ところで、このふたつのグループが議論を闘わせたのは、認識理論にもまして、倫理問題をめぐってであった。本稿では、倫理問題をめぐる両グループ間の批判と反論・自己弁護を跡づけ、再検討する。論争の表向きの対立点を明らかにすることはもちろんだが、それにとどまらず、深層に潜む隠れた論点、さらには、ともにマルクス主義哲学の再構築をめざすものとしての問題意識や方向性の共通点に迫りたい。その際、経験批判論グループが新カント派をどのように批判しているのかという点に、とくに大きな注意をはらうことにする。経験批判論グループは、既存のマルクス主義と

それが依拠する西欧近代的な世界観を批判し、それを超克した新たなマルクス主義哲学を構築しようとしていたのであるから、先行する新カント派グループの実証主義批判にたいして、旧来の実証主義擁護を対置するだけではすまないはずである。経験批判論グループの新カント派批判に着目することによって、これまでの理解とは異なる論争の新たな側面が見えてくる可能性がある。第1節では、新カント派グループによる経験批判論批判を、第2節では経験批判論グループによる新カント派批判を検討する。

1. 新カント派による経験批判論者批判

1-1. 宿命論に陥る実証主義

経験批判論者ルナチャルスキーは、新カント派グループのマニフェスト的な論文集『観念論の諸問題』（1902年）にたいする書評（1903年）において、倫理の分野での新カント派グループの実証主義批判を、以下のように要約している。

第一に、実証主義は、その厳格で無条件の決定論において、自由なるものを破壊するものであり、それはなにも評価することなく、ただ冷淡に、いわば機械的に総括し、確認するだけである。第二に、それは快樂主義的功利主義の精神に貫かれている。⁴

ルナチャルスキーがいみじくも指摘するように、新カント派グループが実証主義の主要な誤りとみなすのは、すべてを原因 - 結果関係にもとづく必然性として説明しようとする決定論・宿命論と、人間の幸福を善とみなす功利主義・快樂主義・幸福主義である。

たとえば論文集『観念論の諸問題』所収論文「哲学的観念論に照らした倫理問題」で、ベルジャーエフは、「実証主義者 - 進化論者」という表記をもちいており、明らかに実証主義と進化論を同一視している。そして、「まさに進化論に本質的なのは、特別な重苦しい罪——つまり自由の神の代わりに必然性の神に拝跪することである」と述べている。⁵

ブルガーコフもまた、同じ論文集に収められた論文「進歩の理論の基本的諸問題」において、機械論的世界観に従うならば、世界を支配しているのは機械論的因果性となり、「いかなる創造的思考も理性的意味もないこの死せる運動の中には、生きた原理はなく、あるのはただ物質の一定の状態のみ」であり、真理も誤謬も、善も悪もない、と批判的に論じている。⁶

また、功利主義・快樂主義について、ブルガーコフは同じ論文で、「この視点〔幸福主義〕から見れば、理想とは人類を動物状態に転化することになってしまうだろう」と述べ、さらに、幸福主義は「ある世代の苦痛が別の世代の幸福への架け橋である」という矛盾に直面すると指摘している。⁷

新カント派グループは、人間の自由な発展は所与の現実から因果法則によって導きだされるものではないと考え、ア・プリオリに設定される絶対的な理想や目的こそが、人々に自由な創造行為と発展を保証し、推進すると主張する。ベルジャーエフは論文集『観念論の諸問題』で、「道徳的発展という観念は、この発展によって実現されるべき最高の目的という観念なくしては、考えられない」と述べている。⁸ブルガーコフもまた、同じ論文集で、こう述べている。

もし我々が、歴史が絶対者の開示であることを認めるならば、まさにそれによって我々は既に、歴史を支配しているのが偶然性や因果関係の死せる法則性ではないことを認めているのである。〔中略〕そして、絶対者が自由と同義語であるならば、歴史の形而上学とは、歴史の中に自由の原理が

開示されることであり、機械的因果性にたいするその勝利が開示されることである。⁹

このように、新カント派グループは、形而上学的絶対者の存在とア・プリオリの理想や目的、それにもとづく道徳や義務が人間の自由と発展とを保証するという見解にもとづいて、実証主義を、人間の自由を奪う宿命論に陥るものとして、否定する。

1-2. 実証主義の典型としての経験批判論

こうした新カントグループの実証主義批判は、旧来のマルクス主義のみならず、後発の経験批判論グループにも向けられる。新カント派グループは、経験批判論グループの登場直後から、辛辣な批判をくわえている。

経験批判論者ボグダーノフの著書『史的視点から見た認識』（1901年）にたいする書評の冒頭で、ベルジャーエフは、ボグダーノフが哲学と科学とを混同しており、哲学の問題を自然科学とりわけ生物学によって解決しようとしていると、厳しくとがめている。さらに、「人間の生の精神的な善——認識、道徳性、宗教、美——は、ボグダーノフ氏においては、自己価値をもたない。それらは生存闘争の条件への適応によってひきおこされるただの幻想でしかない」との非難を浴びせている。¹⁰

また、1904年の論文「新たなロシアの観念論」で、ベルジャーエフは、経験批判論グループの論文集『實在論的世界観概説』（1904年）に触れているが、ここでも、「この論集の哲学全体が生概念をめぐる純粋に言葉のトレーニングに帰しており、善とは生の最大限であり、美もまた生の最大限であり、進歩とは生の成長であるなどといった、同語反復的な主張に尽きている」と手厳しい。¹¹

有名な論文集『道標』（1909年）では、ベルジャーエフは、哲学的真理をプロレタリアートの利益や幸福、社会革命に従属させ、それらを基準に哲学を判断するロシア・インテリゲンツィアの功利主義的な思考様式を批判しているのだが、その際、そのもっとも顕著な例として経験批判論者ボグダーノフとルナチャルスキーが名指されている。ベルジャーエフはこう述べている。

インテリゲンツィアは、たとえばマッハの認識論が正しいか誤りというような問題には興味がない。彼らが興味をもつのは、この理論が社会主義の理想に都合がよいかどうか、プロレタリアートの福祉と利益に役だつかどうかということだけである。〔中略〕我が国のマルクス主義のインテリゲンツィアは、アヴェナリウスの経験批判論をもっぱら生物学的唯物論の意味で受け入れ、解釈した。なぜなら、それは史的唯物論を正当化するうえで有利なことがわかったからである。¹²

このように、ベルジャーエフは、経験批判論グループの哲学に、実証主義のふたつの否定的特徴である自然科学・生物学主義と功利主義の結合を見てとっている。つまり、新カント派グループは、自分たちよりもやや遅れて登場した経験批判論グループを、新しいマルクス主義哲学を構築しようというその志向に反して、旧来の実証主義の枠内にとどまるもの、さらにはその最も典型的で顕著な形態とみなしている。

2. 経験批判論者による新カント派批判

2-1. 自由と進歩を妨げる保守主義

経験批判論グループは、新カント派グループにたいして激しい対抗意識を燃やし、『観念論の諸問題』に呼応して自分たちの論文集『實在論的世界観概説』を刊行したほか、新カント派グループの

主な著作にたいして、そのつど書評や批判的論文を発表して論戦を挑んでいる。経験批判論グループが執拗に攻撃したのは、新カント派グループの認識理論にもまして、その倫理思想であった。『観念論の諸問題』にたいするボグダーノフとルナチャルスキーの書評はいずれも、この問題に大半の紙幅を費やしている。経験批判論グループは、新カント派が唱える絶対的な「義務」や歴史の「目的」の観念を問題視する。

ボグダーノフは、『観念論の諸問題』にたいする書評「新たな中世」(1903年)において、観念論者の唱える「義務」の観念は空虚で、きわめて多様な内容を含めることができるものであり、したがって、それ自体としては道徳生活にとっての一定の方向を指し示すことはできない、と述べる。くわえて、この「義務」の概念がひとたび「かくあらねばならない」という一定の内容を得るならば、それ以上の運動を阻害すると指摘し、善という倫理は保守的性格をもち、不断の発展への志向と矛盾すると述べ、「変化しない規範や絶対的目的といった観念が一度意識をとらえるなら、そこには徹底した進化的思考の場はない」と断じる。¹³

ボグダーノフの主張では、固定された絶対的で不変の目的や理想を設定することは、人類の発展にある水準でとどめ、それ以上の発展を不可能にすることにほかならない。ボグダーノフは、新カント派グループが提起する理想や目的がかえって、人々の自由と発展を妨げるものであると非難する。

さらに、ボグダーノフは、論文「過去の反響」(1904年)において、ブルガーコフが宿命論に陥っていると主張する。ボグダーノフによれば、ブルガーコフは、「進歩の科学—哲学的理論を、それに進歩の無条件の必然性への信仰を書きくわえることによって—むろん故意にはないが—歪めてしまった」のであり、それによって、「宿命論の色合いをいちじるしく強めた」。ボグダーノフは、「ブルガーコフ氏の目には、権威的依存の和らげられた形式が真の「精神的自由」であるかのように見えている」と揶揄している。¹⁴

このように、新カント派グループは、実証主義の世界観を宿命論であると批判し、義務や定言命令を導入することによって、宿命論を克服できると考えるのだが、これにたいして経験批判論グループは、新カント派が自由の根拠として提起しているものがかえって人間の自由を奪い宿命論をもたらす、と反論するのである。

2-2. 「生の充足」としての人類の進歩

経験批判論グループは、新カント派グループが進歩の目的や倫理、義務を設定しようとしたことを厳しく論難したが、進歩の理念や道徳的発展そのものにたいしては、けっして否定的ではない。経験批判論グループは自分たちも理想を否定するものではない、と発言する。たとえば、ルナチャルスキーは論文「ある思想家の変貌」(1904年)でこう述べている。

奇妙だ！いまや実証主義者たちは、彼らがあたかも常に事実を確認するだけで、現実の批判と積極的理想の創造とは無縁だという理由で、非難される。〔中略〕違うのだ。いわゆる反ブルジョワ的傾向の実証主義者たちは、猛然と現実を批判し、未来像を、高尚で輝かしい理想を描いた。その前では観念論者—形而上学者の魔術幻灯は色あせてしまう。〔中略〕

人間は論理的判断にもとづかずして遠方を望む。しかし、そうであるからといって、実証主義が自由と発展という理想の基礎づけに何もあたえないと主張するのは、まったくの偽りである。さらに大きな偽りは、自由と発展という理想が形而上学的にのみ基礎づけることができるという主張である。¹⁵

ルナチャルスキーは、『観念論の諸問題』書評で、「知と性格の発展、人類のタイプの完全化、拡

大する生の充足」を「善」として掲げ、この「生の充足」こそが真・善・美を和解させる基準であるとして、この自説を「実証的な理想主義（イデアリズム）」と名づけている。その際、「ベルジャーエフ氏もまた、理想の基準としての「生の充足」に達しているのだが、それを生物学的にはなく、倫理的に理解すると述べている」、と指摘している。¹⁶

そのうえで、ルナチャルスキーは、現実と理想とを結合させるのは「闘争、能動性、人類の持てる力の合目的な消費、芸術的創造」であると述べ、「実践的理想主義者（イデアリスト）になるために、我々には形而上学はまったく必要ない」と断じる。さらに、ルナチャルスキーは、「能動的な実証主義者」においては、個人の願望と社会的理想とが一致するため、義務の意識は生じない、と論を展開するのだが、その際、「倫理的動機と主観的個人的モチーフとの一致に道徳の高みを見てとる見地からは、「自己犠牲」の理想はその価値を失う」との新カント派セムヨン・フランク（1877-1950年）の言葉を引用して、観念論者たちにとっても、我々にとっての同じように、理想的であるのは義務の意識がまったく存在しないような人間であるはずだ、と述べている。¹⁷

また、ボグダーノフも、書評「新たな中世」において、「道徳的発展という観念は、この発展によって実現されるべき最高の目的という観念なくしては、考えられない」というベルジャーエフの発言を引用しながら、「生の充足と調和の無限の増大が進歩のリアルな内容であるのだが、これは「最終目的」や不動の理想についてのあらゆる思想を論理的に排除する」と主張している。さらに、「機械論的世界理解」は、その古いきわめて原始的な形態においてすら〔中略〕、けっして善と悪、真理と誤謬の存在を否定するものではなく、ただそれらに絶対的性格をあたえることだけを拒絶する」とことわっている。また、論文「過去の反響」では、絶対的で最終的な理想を想定することを否定して、「能動的意志と結びついた自由な思考は、ひとつの理想が達成されたならば、ただちに別の理想へと創造的に移行する」と述べている。¹⁸

このように、新カント派グループは経験批判論グループの哲学には理想が欠如していると非難するが、経験批判論グループは理想の設定それ自体は否定しない。彼らが拒絶するのは形而上学的で絶対的な目的と義務の観念のみである。経験批判論者は、新カント派の唱える理想を共有したうえで、こうした理想設定と実現は、形而上学的で絶対的な理念に依拠しなくても、充分可能であると主張する。他方、理想とされる人類の発展の方向性やその内容については、経験批判論グループは新カントグループにたいして異論を唱えてはいない。

実際、ルナチャルスキーやボグダーノフが指摘するように、新カント派のベルジャーエフも、実証主義の生物学主義を批判しながらも、経験批判論グループと同じように、人間の生の発展を理想として掲げている。著書『社会哲学における主観主義と個人主義』（1901年）において、ベルジャーエフは、歴史過程の根底に「人間と自然との闘争」があり、それは「人類の生産力の発達において表現される」と主張している。ただし、「人間の心理は生のための社会的闘争の過程において成長するが、生のための社会的闘争は心理的過程であり、いかにしても力学の用語では解釈できない」のであり、「生産力の発展は人間の不断の能動性を前提とし、意志を前提としている」と述べている。さらに、論集『観念論の諸問題』では、ベルジャーエフは、「倫理における進化論的傾向は、快樂主義と功利主義にある修正をもたらそうとしており、倫理に生の発展という観念を持ち込んでいる」と指摘し、註でスペンサーの名前をあげている。そして、「我々は生の最大限、その最大の発展の原則を認めるが、我々においてこの原則がもつのは、進化論者におけるような生物学的な意味ではなく、倫理的な意味である」と述べており、生の発展という理想においては、自身と実証主義者とが一致していることを認めている。¹⁹

経験批判論グループの側からの議論に目を向けることによって、倫理をめぐるふたつのグループ

の論争に、いずれの理論が人間の自由な能動性による理想の実現を理論的に保証することができるのかという論点があることが見えてくる。

2-3. 安直な解決策を求める精神的な弱さ

経験批判論グループは、新カント派グループが掲げる絶対的で不変不動の倫理や目的を不必要なものとして切り捨てるが、その際、新カント派グループがそうしたものに依拠することを、精神の弱さの表れであると攻撃する。

ボグダーノフは、書評「新たな中世」において、最終目的を否定した先の引用箇所が続けて、無限の過程は神経の弱い人間には耐えられないだろうが、とつけくわえている。²⁰ ボグダーノフは、目的や理想を設定することを、なんらかの規範に頼ろうとする精神の弱さの表れとみなすのである。さらに、「あらゆる善と理性的なものとは最終的に勝利するという喜ばしい確信は、機械論的世界理解にはいかなる基盤ももたない」というブルガーコフの言葉を引き、抽象的な科学的理論は人々に「喜ばしい確信」を呼びおこすものではけっしてないと釘を刺したうえで、「このような「喜ばしい確信」を世話好きな楽天的形而上学という「まじないやいんちき」に探し求める」のは、「最大限に生き生きした生との結びつきとは無縁で、自身に最も堅固な支柱を感じることをできない人々」だと断じている。²¹

ルナチャルスキーは、論文「ロシアのファウスト」（1902年）で、「人類は、自らの存在の基盤を、自然に適應し、自然を自らに適應させることによって、ゆっくりとしか変えることができない」と述べ、他方、「ブルガーコフ氏は、形而上学的で宗教的な統合（ジンテーゼ）の方法によって、この問題を解決し取りのぞくことを軽く請け負う」として、これを「うわべだけの問題のうわべだけの手段による」解決だと断じている。そして、未来の人類の幸福のために現在の人々が犠牲を強いられなければならないのか、という「カラマーゾフの問い」は「心気症患者とデカダン主義者」にとってしか存在しない、と断じる。²²

こうした安直な解決という批判は、ベルジャーエフにも向けられてる。ルナチャルスキーは論文「生の悲劇性と白魔術」（1902年）で、こう述べている。

読者は以下のような主張をいかが思われるだろうか：「唯心論的形而上学が…〔中略〕最高で最終的な楽天主義をもたらす。」ベルジャーエフ氏は人類を悲しませることを望まず、「最終的楽天主義」を約束したいと考えている。〔中略〕問題のすべては、ベルジャーエフ氏が自己の悲劇性にたいしてまじめにとりくんでいないということにある。²³

こうした安直な結論に飛びついてしまう原因を、ルナチャルスキーもまた、ボグダーノフと同じように、新カント派グループの理論家たちの弱さに見てとろうとしている。これに、ルナチャルスキーは、能動的で「創造的な実証主義者」を対置する。「能動的な人格」にとっては、生は創造すること、社会的創造に参加することを意味するのであり、義務や自己犠牲的利他主義といったものは奇妙に聞こえる。別の論文「ロシアのファウスト」でも、実証主義者にとっては、義務についてのあらゆる問題はおのずから意味を失っており、義務とは空虚な虚構であると述べ、「健全で創造的な気質の人々においては」、この問題は「おのずから解決されている」と主張している。²⁴

ちなみに、このように論敵の思想を安易な解決策とする記述は、新カント派グループのベルジャーエフにも見てとることができる。ボグダーノフの著書『史的視点から見た認識』にたいする書評で、ベルジャーエフは、「彼〔ボグダーノフ〕は自然科学と医学の過程を終えたということだけを根拠

に、最も難解な哲学的、認識論的、心理学的、社会学的諸問題を、容易に解決する資格が自分にあると考えている」と述べ、さらに、「ボグダーノフ氏の精神的視野はあまりに狭い。その視野の内では、すべてがひどく単純で、ひどく精彩を欠き、単調で退屈だ。なににもまして退屈なのだ」と論じ、自身の「哲学的非文化性」を自覚し、「まじめな哲学的教養」の必要性を認識しなければならない、と説いている。²⁵

このような、論敵の思想的試みを安直な解決策と非難し、その原因を無教養や精神的弱さにあるとする論法は、20世紀初頭のロシア・マルクス主義知識人に共有されたものである可能性がある。

おわりに

ふたつのマルクス主義陣営、新カント派グループと経験批判論グループとは、倫理面において、一見したところでは、まったくあいられない見地に立っているように見える。しかし、とりわけ経験批判論グループからの視点に着眼すると、表層の対立とは異なる論争の構図が明らかになる。

新カント派グループと経験批判論グループは、たがいに論敵の倫理思想を人間の自由を奪う宿命論に陥るものと非難していた。しかし、その一方で、生の充足・発展を人類の理想と目的と見る倫理的見解を共有していた。両グループの論争は、この理想を人々の自由で能動的な実践によって実現することを可能にする理論の構築をめぐるものと見るができる。

また、経験批判論グループが、新カント派グループの倫理概念を安易な解決策と揶揄しながらも、自らの立場では倫理問題は「おのずから解決されている」と述べているように、この論争には、人間精神の深刻な問題をたちどころに全面的に解決できる即効薬を求める若きマルクス主義知識人たちの性急さも浮き彫りになっている。

注

- 1 20世紀初頭ロシア・マルクス主義の3つのグループについては、佐藤正則「革命と哲学：世紀転換期ロシアにおけるマルクス主義者たちの哲学的模索と論争」塩川伸明・小松久男・沼野充義編『ユーラシア世界 第3巻 ユートピアと記憶』東京大学出版会、2012年、51-76頁。
- 2 知識人間の論争についての欧米の研究者の図式については、Christopher Read, *Religion, Revolution and the Russian Intelligentsia, 1900-1912: The Vekhi Debate and its Intellectual Background*, London, Macmillan, 1979; James West, *Russian Symbolism: A Study of Vyacheslav Ivanov and the Russian Symbolist Aesthetic*, London, Methuen, 1970.
- 3 これについては、佐藤正則「二十世紀初頭ロシア思想の新たな見かた 知的転換と知識人との論争をめぐる」松井康浩編『20世紀ロシア史と日露関係の展望 議論と研究の最前線』九州大学出版会、2010年、13-37頁。
- 4 Луначарский А. В. Этюды критические и полемические. М., 1905. С.233. 強調は原文、以下同様。
- 5 Бердяев Н. А. Этическая проблема в свете философского идеализма // Проблемы идеализма. М., 1902. С.96-97, 103.
- 6 Булгаков С. Н. Основы проблемы теории прогресса // Проблемы идеализма. С.7.
- 7 Там же. С.23, 26.
- 8 Бердяев Н. А. Этическая проблема в свете философского идеализма. С.112.
- 9 Булгаков С. Н. Основы проблемы теории прогресса. С.35.

- 10 *Бердяев Н. А.* Заметка о книге г. Богданова “Познание с исторической точки зрения”// Вопросы философии и психологии.1902. Кн.4. С. 839, 850-851.
- 11 *Бердяев Н. А.* Sub specie aeternitatis: Опыты философские, социальные и литературные (1900-1906г.). СПб., 1907. С.180.
- 12 *ベルジャーエフ* 「哲学の真理とインテリゲンツィアの正義」、ブルガーコフ、ベルジャーエフ、ストルーヴェ他著『道標 ロシア革命批判論文集1』長縄光男、御子柴道夫監訳、現代企画室、1991年、17、25頁。表記を一部改めた。
- 13 *Богданов А. А.* Из психологии общества. 2-е изд. СПб., 1906. С.186-188, 196.
- 14 Там же. С.249, 260.
- 15 *Луначарский А. В.* Этюды критические и полемические. С.289, 292.
- 16 Там же. С.235-236.
- 17 Там же. С.235, 242.
- 18 *Богданов А. А.* Из психологии общества. С.193-194, 208-209, 259.
- 19 *Бердяев Н. А.* Субъективизм и индивидуализм в общественной философии. М., Канон+ ОИ «реабилитация», 1999. С.149-150, 173; *Бердяев Н. А.* Этическая проблема в свете философского идеализма. С.102-103, 104. この点については、以下も参照のこと。佐藤正則「ベルジャーエフの精神的転換と唯物論的歴史理解」『言語文化論究』第32号、九州大学大学院言語文化研究院、2014年、11-20頁。
- 20 *Богданов А. А.* Из психологии общества. С.194.
- 21 Там же. С.215.
- 22 *Луначарский А. В.* Этюды критические и полемические. С.182, 184.
- 23 Там же. С.196.
- 24 Там же. С.199-200, 184.
- 25 *Бердяев Н. А.* Заметка о книге г. Богданова. С.839, 852, 853.

Спор об этике между «неокантианцами» и «эмпириокритиками»

Масанори САТО

Русских марксистов начала XX века в зависимости от их философской направленности можно разделить на три непримиримые группы: «материалистов» (Г. Плеханов и др.), «неокантианцев» (С. Булгаков, Н. Бердяев и др.) и «эмпириокритиков» (А. Богданов, А. Луначарский и др.). Настоящая статья посвящена переосмыслению характера спора об этике, разгоревшегося между «неокантианцами» и «эмпириокритиками» в 1900-1910 гг.

Как известно, «неокантианцы» отвергали позитивизм за его естественнонаучный (биологический) детерминизм и гедонизм (утилитаризм) и рассматривали эмпириокритицизм в качестве его типичного выражения. Для преодоления позитивизма «неокантианцы» проповедовали идеи верховного идеала и абсолютного долга. В свою очередь, «эмпириокритики», возражая «неокантианцам», утверждали, что абсолютный идеал подчиняет себе людей и неизбежно приводит к фатализму.

«Неокантианцы» критиковали взгляды «эмпириокритиков» за отсутствие идеала, однако «эмпириокритики» не отвергли идеал сам по себе: они только лишь отказывались считать идеал и долг метафизическими и абсолютными категориями. По их утверждению, постановка и реализация идеала возможны и без абсолютизации идей.

Обе группы философов одинаково находили свой идеал в полноте и развитии человеческой жизни и стремились создать этическую теорию для реализации этого идеала через активную человеческую деятельность. При этом обе группы осуждали мнение противников за якобы слишком поверхностное разрешение основополагающего вопроса философии.

Нужно также отметить, что, несмотря на разницу философских взглядов, обе группы имели перед собой одинаковые цели и фактически спорили по поводу способов разрешения общей задачи. Вне всякого сомнения, в этом споре отразилось стремление молодых марксистов к немедленному и полному решению самых серьезных вопросов человеческого духа.